

1. 生活環境整備はおくれている

横浜市民はどのような環境の中で生活しているのだろうか。

いま、全国的に所得倍増計画のもたらした地域の格差が問題とされており、なかでも大都市問題は、ここ数年、われわれが生活している横浜市においても、全く同様な矛盾がおこっている。ここでは、社会的資産としての公共施設を中心に、市民をとりまく生活環境のゆがみの現状と問題点をとり出して、市民がどのような環境のなかで生活しているかを描いてみよう。

大都市においては、一般的にどこにでもあらわれていることだが、住宅難の深刻化、地価の上昇、交通難の激化と交通事故の頻発、上下水道などのアンバランス、大気、河川の汚濁、騒音、火災などを含めた公災害、緑の不足、保育所・老人ホームなど社会福祉施設の貧弱さ、教育、文化施設の不足など横浜においても同様のことがいえる。

ミナトから重工業都市への転換をはかり、工業化を急ぐのあまり、生活環境諸施設の立ちおくれは市内いたるところで表面化している。6大都市最高の増加率を示す人口は、横浜市を性格を一変し、東京のベッドタウンと化しつつあり、住宅の不足は、市民を過密住宅、同居、高家賃の間借へと追いあげ、その結果は、低家賃の公営住宅の倍率となってあらわれてきている。住宅建設に要する土地の取得難は、市街地地価の大幅な値上りによって、近郊地帯へ波及し、数年前の田畑・山林地帯が変貌して住宅・工場地帯を形成してゆく。これら新市街地の形成が、無秩序に行なわれると、そこはふたたび住みにくい都市と化し、道路、公園広場、学校、上下水道などの公共施設が一体となっ

た、一つのコミュニティーにはほど遠くなる。

市街地中心の道路は市の中心部から大きく放射線状に伸びて、東京、藤沢、厚木、横須賀と、都市への連絡重要幹線ばかりが目につき、市域を取り巻く環状線の不足が目立つ。旧市街地の表通りはほぼ舗装されても、裏通りや、郊外住宅地は依然として一雨降ればドロコ道と早変わりする道路の何と多いことか。一方舗装された市街地においては、交通量の増加による道路需要が間に合わず、いたるところで車のストップ現象が生じ、やがては東京なみになることが予想される。また、家屋の密集による火災の危険や、騒音に悩まされ、子供の遊び場にこと欠くという姿は、大都市が市民の犠牲において負わなければならない宿命なのであるだろうか。

工業都市を目ざしてきた横浜市にとって、根岸湾や本牧関連産業地帯の埋立による大工場群の存在が、今後どのような位置を占めるであろうか。これら工場地帯から発する煤煙などによる大気汚染、工場排水による水質汚濁など、市民への影響度はどのように変わってくるのか。問題は山積みするほど堆積している。